

【主な関心事項】

- 有機物がさらに削減され、無機物だけの海になることを懸念するが、どのように管理を行うべきか
 - ＞伊勢湾の有機炭素量は2000年代以降、減少傾向にはない。
- 必要となる栄養塩類の濃度等をどのように設定すべきか
 - ＞栄養塩の濃度は陸域負荷だけで決定されているわけではない。下水処理場の管理運転などを用いて、栄養塩の負荷量を調節して、海の応答を調査するのが良いと考えられる。
- 必要となる栄養塩類の季節ごとの違いはあるか
 - ＞夏季には基礎生産が活発になるので、必要となる栄養塩は増加する。
- 漁場近くの栄養塩類のトレンド等を把握する方法
 - ＞伊勢湾では、環境省の公共用水域水質調査(月1回)、広域総合水質調査(年4回)、愛知水試と三重県水産研究所による浅海調査(月1回)に加えて、下水処理場の管理運転に伴う栄養塩の調査が行われている。また、国交省のモニタリングポスト(湾内4カ所、湾外1カ所)で水温・塩分・クロロフィル・溶存酸素などの調査(1時間毎)が行われており、調査体制はかなり充実している。

- 貧酸素水塊の発生等にあたって森林による影響はあるか

- 戦後の人工林の成長(材積の増大)により、降雨でもたらされた栄養塩(主に窒素)が森林で吸収され、海に流出しにくくなっているという話はある。それは貧栄養化に寄与するが、貧酸素水塊の発生にどのように影響しているかは明確ではない。

- 藻場の減少の原因として栄養塩類の不足は関係しているか

- 黒潮の大蛇行で高水温化とともに低栄養塩化が起きている。太平洋沿岸の磯焼けについては、低栄養塩化も関係していると思うが、詳しいデータは持っていない。伊勢湾内のアマモ場の減少は栄養塩の不足とはほぼ無関係と考えられる。

- 海洋における浚渫事業の効果はどのようなものが考えられるか

- ヘドロを取り除くことで、海底面における酸素消費量が減り、硫化水素や栄養塩の溶出が減るので、海域の環境が改善する。
 - ただし、浚渫には多大な費用が掛かるので、伊勢湾などの広大な海域には適用しにくく、港湾などの狭い海域に適用されるものと考えられる。